



安心の地域医療を支える

# JCHO NEWS

Japan Community Health care Organization News



## 職場チームによる

お褒めレロ



## 業務改善の取り組み



## 第7回JCHO地域医療総合医学会の開催準備進む

一般社団法人地域医療機能推進学会  
事務局長 中村 仁



### 地方開催の第1回目

一般社団法人地域医療機能推進学会（山本 修一 理事長）では、『第7回JCHO地域医療総合医学会』を2022年10月21日（金）・22日（土）に『熊本城ホール（熊本市）』を会場とし、会長のJCHO熊本総合病院 島田 信也院長のもと、現地開催に向け現在、鋭意準備を進めております。

### 本当に参加してよかった JCHO学会 in 熊本

メインテーマを「ウイズウイルス時代の『新しい医療と地域づくり』」とし、プログラムは、JCHOにおける喫緊の課題や取り組み等をテーマとしたシンポジウムや講演とともに、JCHO職員の皆様から応募戴いた541題の一般演題（口演発表・ポスター発表）を併せると、本学会史上最大規模の構成です。さらに、特別ゲストには、わが国を代表する歌手であり、熊本市親善大使として震災後の復興に精力的にご活動されている「石川さゆりさん」をお招きします。ぜひ、阿蘇・天草・熊本城といった日本でも指折りの自然と文化があり、山海の美味しい食文化もある熊本の地にお越し頂きますよう、心からお待ちしております。

### 主なプログラム

- 石川さゆりトーク&コンサート
- 会長講演「失敗、失敗、また失敗」  
【演者】島田 信也 会長
- 会長企画「私と感染症との闘い」  
【演者】尾身 茂 公益財団法人結核予防会 理事長/JCHO名誉理事長
- 教育講演「病院発展の鍵となるリーダー育成」  
【演者】吉田 直矢 熊本大学病院 特任教授
- 継続テーマシンポジウム（特定行為研修、事務職のマネジメント、地域医療ネットワーク）
- シンポジウム（職場づくりのコミュニケーション、働き方改革、医療安全、総合診療医）
- 部会企画セッション（看護・臨床検査・栄養・放射線）
- 一般演題（口演発表328演題、ポスター発表213演題）
- ランチョンセミナー、モーニングセミナー等

プログラムの情報は随時HPでご案内してまいりますのでご確認ください。

学会ホームページ <https://www.jchs.or.jp/jcho2022/>

### 【訂正とお詫び】

広報誌「JCHO NEWS Vol.33」掲載内容の一部訂正について  
広報誌「JCHO NEWS Vol.33」の掲載内容について一部誤りがありましたので、下記の通り訂正させていただくとともに、深くお詫び申し上げます。ホームページの「JCHO NEWS Vol.33」は正しい内容に訂正済です。

#### ■P3

「京都府立医科大学と京都鞍馬口医療センター双方の医療機能を生かした効率的な医療連携」の

【誤】2021年3月26日 ➡ 【正】2021年11月26日

#### ■裏表紙

「施設一覧 登別病院」の電話番号の誤り

【誤】0143-84-2165 ➡ 【正】0143-80-1115

### 02 【Information】 第7回 JCHO地域医療総合医学会の開催準備進む

一般社団法人地域医療機能推進学会 事務局長 中村 仁

### 03 山本新理事長 就任のご挨拶

### 04 理事・特任補佐・地区担当理事による 令和4年度の抱負

### 06 【特集】 職場チームによる業務改善の取り組み

薬剤部から病院経営に貢献したい！  
～院長に褒められたくて2020～

群馬中央病院 主任薬剤師 新木 美枝

### 07 愛は、病院を救う ～お金があると愛が潤います～ 本当に愛が潤い始めています。

桜ヶ丘病院 看護部長 岩崎 厚子

### 08 外来診療科受付の集約化に向けた取り組み ～医師の働き方改革推進への道～

星ヶ丘医療センター 経理課長補佐 福永 幸子

### 09 電子カルテ導入に伴う外来紙媒体の統一化および 患者満足度向上への取り組み

下関医療センター 副看護師長 吉田 智子

### 10 地方都市におけるJCHO主導の新型コロナウイルス感染症の 終息に向けた組織横断的診療戦略

熊本総合病院 看護部 副看護部長 古賀 敦子

### 11 JCHO 山梨病院 2020年度経営改善プロジェクト ～TQM（Total Quality Management）活動の試み～

山梨病院 地域医療連携室係長 中村 成一郎

### 12 【Topics】 新型コロナウイルス感染症の 臨時医療施設での薬剤師活動を今後に繋げる ～JCHO法第21条による 薬剤師広域派遣より～

東京高輪病院 薬剤師部長  
本部医療部医療課薬事専門職担任 片山 歳也

### 14 【広報アラカルト】 病院食の取り組み

京都鞍馬口医療センター 栄養管理室長 田川 麗子  
熊本総合病院 副栄養管理室長 白坂 亜子  
大阪病院 副栄養管理室長 塩田 恵理都  
人吉医療センター 副栄養管理室長 中村 利枝

### 16 【JCHO GROUP】 全国病院MAP

# 山本新理事長

## 就任のご挨拶

本年4月より新たにJCHO理事長に就任しました山本修一です。

尾身前理事長をはじめ皆様とはこの1年間ご一緒させていただき、多くを学ばせていただきました。コロナ後の病院経営は、より一層厳しくなると予想されます。発足して8年というまだまだ若いJCHOの舵取りをどうするか。厳しい現実に向き合いつつ、27,000人からなるこの巨大な全国組織をさらに発展させるべく決意を新たにしています。

簡単な自己紹介をいたします。私は1983年に千葉大学を卒業後、眼科医として網膜硝子体手術を専門に行ってきました。アメリカ留学やいくつかの大学病院での勤務を経て、2003年より千葉大学病院の眼科教授に就任し、副病院長を7年、病院長を6年務めました。

病院長時代は決して順風満帆ではありませんでした。850床で3,000人以上の職員を抱える大学病院という複雑な組織の運営に加えて、赤字体質からの脱却や医療安全問題など多くの難題に直面し、病院経営の抜本的な改革も行ってきました。その時期に、厚労省や文科省で携わっていた仕事が縁となり、昨年よりJCHOの理事に就任させていただいた次第です。こうした修羅場で得た知見が、少しでもJCHOの発展に役立てばと思っています。

私は、医療機関として一丁目一番地は、「良質な医療の提供」と「健全な経営」の両輪を回すということに尽きると考えています。良質な医療を提供しなければ患者さんは来ませんし、患者さんが来なければ収入は増えず、良い医療も行えません。私は、地域医療の要と位置づけられたJCHOの57病院すべてで、この原理原則を達成してほしいと願っています。『地域から信頼され、必要とされ続ける』ためにこれまでの慣習に縛られずに変革を続けていきたいと思います。そして、そのための支援こそが、本部の役割であると考えています。

各病院においては、日々の業務改善や現場力の底上げに加えて、視点を少し高くして、地域で発展するための中長期の成長戦略を立て、職員一丸となって未来の病院のありたい姿、あるべき姿に挑戦して下さい。院長をはじめとする病院幹部の皆さんのリーダーシップにも大いに期待します。

本部においては、現場の方々の努力を支援するため、経営強化本部や医療の質・安全管理委員会などによる対話型の経営支援を進めます。そしてリーダーシップをはじめとする各種教育や人材育成を充実させて、『教育のJCHO』を築いていく方針です。また、私や理事は、現場の声を聴くために精力的に病院に出向きます。「現場のかいた汗が報われる組織」、これをJCHOのモットーとしたいと考えております。

各病院と本部が一丸となって、「地域から信頼され、必要とされ続ける」、そして職員が「JCHO病院に勤めてよかった」と思える『チームJCHO』を作り上げていきたいと思います。

皆さま、これからどうぞよろしくお願いたします。



# 理事・特任補佐・地区担当理事による

## 理事



理事  
(管理・労務・経営担当)

### 屋敷 次郎

6月29日付けで理事(管理・労務・経営担当)を拝命いたしました。出身は東京、育ちは鹿児島、平成2年に旧厚生省に就職し、東京のほか、岡山、広島など、様々な地での勤務を経てきました。

JCHO勤務となり、新型コロナウイルス感染症により大きく変わった医療へ対応しつつ、日本の医療の中でのJCHOのプレゼンス・ブランド・立ち位置を確固たるものとするべく、各拠点・現場の皆様との動きや思いに寄り添いながら、微力ながら職責を務めていきたいと考えております。

ご指導のほどよろしく申し上げます。



理事  
(医療・看護・介護・地域包括ケア担当)

### 田中 桜

4月に着任して早4か月目になりました。2022年度は、できるだけ多くのJCHO病院を訪問させていただき、立地場所、施設の状態、患者さんの様子等を肌で感じとり、職員の皆さま方から直接お話を伺うことで、課題を把握し改善に向けてお手伝いしたり、素晴らしい取り組みを横展開したりすることで、JCHO病院を通じた地域医療や地域の活性化に貢献させていただきたいと思っております。

引き続きよろしく申し上げます。



理事  
(病院経営・総合診療医担当)

### 楠 進

2020年4月からJCHO本部理事をつとめています。コロナ禍においてJCHO各施設には多大なご尽力をいただいたことに、心から敬意を表したいと思います。まだコロナ対応は完全には終息していませんが、これからはコロナ後を見据えて各施設の強みと地域のニーズを的確に把握して、引き続き良質な医療を地域に提供することが求められます。皆様とともに知恵を絞っていきたく考えていますので、今後ともよろしくごお願い申し上げます。



理事  
(IT担当)

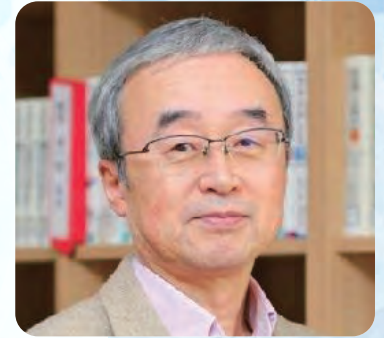
### 佐藤 秀暢

本年4月に着任したばかりですので、まずはJCHOグループが抱えているIT整備の課題や現場の要望を掴みたいと考えています。

その上で、地域医療ネットワークや遠隔読影サービスへの取り組み、JCHOネットの再構築などJCHOグループにとって有益なIT化の在り方を提案してまいります。

また、今までのやり方を見直しながら、現場で苦勞されている皆さんと近い目線に立って、ともにIT化を進めて行きたいと思っております。

## 特任補佐



特任補佐

### 徳岡 晃一郎

2022年度はJCHOが新しい体制になっての初年度です。コロナ後の難局を乗り切るスタートラインでもあります。そのカギは組織能力の一段のパワーアップであり、その原動力は、一人一人のやる気(Will)と能力(Skill)、そしてそんな人材を活かし、つないで集合知にするリーダーシップとコミュニケーションです。だれもがワクワクと楽しみながら、JCHO全体として質の高い効率的な医療が提供できるようにリーダーシップとコミュニケーションの側面で皆さんを支援していきたいと思っております。



特任補佐

### 内野 直樹

駿鳥は敵に襲われた際、地面に顔を埋めて「見ない 聞かない状態」になるという話は何の根拠もない俗説である。

コロナ補助金が廃止される前に水膨れの状態から一日も早く脱する必要がある。(現状認識 課題克服) 地域医療構想という妖怪も再登場するはずだ。現実逃避は病院を減ぼす。

不肖内野も千葉病院で悪戦苦闘中であるが、全57病院が地域で必要な病院として生き残れるよう全精力を傾ける所存である。

実は駿鳥は強いらしい。JCHOも強くありたい。

# 令和4年度の抱負

## 地区担当理事



北海道東北地区担当理事  
仙台病院院長

### 村上 栄一

私は岩手県奥州市（旧水沢市）の出身で、奥羽山脈を見ながら育ち、仙腸関節由来の腰痛をライフワークとしてきました。東日本大震災の際は仙台病院も大きな被害を受けました。しかし、数日後には全国の社会保険病院から救援物資や支援が届き、感動と感謝の涙が出てきたことを思い出します。そして、被害の大きかった南三陸町にも医療派遣ができました。この時ほど全国組織の有難さを痛感したことはありません。

北海道東北地区には7病院があり、少ない医師数の中で病院長の執念で成り立っている病院もあります。今後、地区内の病院長間で協力し、やり繰りしながら、できない部分は本部にもお願いして、エネルギー溢れる仲の良い地区をめざしたいと思っています。



関東地区担当理事  
埼玉メディカルセンター 院長

### 吉田 武史

私は1978年に慶応義塾大学を卒業し、消化器内科に入局しました。難病である「炎症性腸疾患」の患者さんを中心に現在も外来で多くの患者さんを診察しています。

座右の銘は「驕らず謙虚で分相応に」です。これは、学生時代、臨床実習に出る前の授業で、内科の教授から「患者さんも、そのご家族も、病院の職員もあなたたちより人生経験の豊富な方が多いので、謙虚さを忘れずに対応しなさい」と言われた言葉です。今までこの言葉をずっと忘れずに来たつもりです。

本年度は各病院とも「アフターコロナの病院経営」が大きな課題です。地区の全病院がよい方向に進むようかじ取りをしていきたいと思っています。



東海北陸地区担当理事  
四日市羽津医療センター院長

### 村田 安弘

私が東海北陸地区担当理事に就任してから早や2年、本年再びこの重責を担当させていただくことになりました。年に一度は地域内の全病院へ出向き、毎回地域の新しい情報・現地の声を伺うことができ情報共有の重要さや楽しさを感じます。

本年度は診療報酬の改訂や、コロナ患者対応に係る補助金、さらには2024年春に開始される「医師の働き方改革」に向けたタスク・シフト/シェアの導入を含めた対応など課題が山積みです。

多くの問題についての議論と意見交換を行うために、2ヶ月に一度ほど「地区院長会議」開催を予定しています。院長先生間で情報収集・意見交換を行うことで地区内病院の活性化を図ります。忌憚ないご意見をお寄せいただけますよう、よろしくごお願い申し上げます。



近畿四国地区担当理事  
大阪病院院長

### 西田 俊朗

私は1981年に大阪大学を卒業し、専門は消化器外科で、主に上部消化管～胃癌やGISTの診療と研究開発にあたってきました。2013年からは国立がん研究センターで勤務し2016年からは同中央病院で勤務しておりました。2020年4月にJCHO大阪病院に入職しました。

これら国の組織や病院には、それぞれのMissionやPurposeがあり、その実現のために各リーダーは適時適切に病院経営や組織運営を実行しなければなりません。

JCHOでも現在、本部を中心にポストコロナを見据えた中長期的な経営戦略の議論が急速に進んでいます。医療を通して地域社会に貢献しJCHOの使命を果たすため、社会や経済、政策の動向を捉え、近畿四国地区皆様方との十分な意見交換を通じて、各病院の運営基盤の安定化に尽力したいと思っています。



九州地区担当理事  
熊本総合病院院長

### 島田 信也

九州地区の苦情係を務めております。本部の役員会等では九州地区の院長先生方のご意見を反映すべく発言を行ってきたつもりではありますが、未だ十分にお役に立っているとは言えません。ただ、補助金が入らないコロナ禍前までは、JCHO全体の黒字額の4分の3を九州地区が貢献していることは九州地区の誇りとするところです。

2022年度は、「九州地区のために良くやってくれている」との評価をいただけるようにさらに努めて参りたいと思っておりますし、熊本城ホール貸切でのJCHO学会も大いに盛り上げたいと存じます。そしてJCHO全体の士気高揚に寄与することに繋がれば、望外の喜びです。

今後も九州地区各病院の課題解決に尽力しながら、JCHOのお役に立てるように努めて参ります。



# 職場チームによる業務改善の取り組み

21年度の優秀賞・優秀ポスター賞6チームの取り組みを紹介します。表彰されたチームの皆さんの努力と思いをお届けしますので、各病院での改善活動にお役立てください。



群馬中央病院 主任薬剤師 新木 美枝

## 1 薬剤部から病院経営に 貢献したい！



院長

～院長に褒められたくて2020～

### 経緯・目的

2020年、新型コロナウイルス感染症の流行により、外来・入院ともに患者さんが激減し、病院経営に影響を及ぼしました。職員一丸となって、危機を乗り越えなければならない状況となり、薬剤部からも病院経営への貢献を目指し、増収とコスト削減を試みました。

### 方法

薬剤部は、以下のように多部門から成り立っています。調剤・病棟・外来から処方動向、入院動向、患者動向などの情報を収集し、薬品管理と医薬品情報室で、薬品動向や、診療報酬、費用対効果について分析し、増収とコスト削減への取り組みを検討し実施しました。



### 増収プラン

- ① 診療報酬・算定
  - 病棟薬剤業務実施加算 → 件数UP！
  - 連携充実加算（外来化学療法加算1）  
令和2年新規加算 → 体制整備
  - 一般名処方加算 → 電子カルテマスタ整備
- ② ワクチン関連
  - 2020インフルエンザワクチン接種数増やす  
（健康管理センターとの協働）  
→ ワクチン確保

### コスト削減プラン

- ③ 院内使用薬剤費削減 → DPCを考慮した薬剤選択
- ④ 期限切れ損耗（高額医薬品等） → 減少！
- ⑤ 手指消毒薬使用量増加対策 → 積極的製剤切替え
- ⑥ 医薬品JCHO共同購入 → 現地入札契約への関わり
- ⑦ 超過勤務の解消 → 勤務シフト組替え

院長！  
ほめて  
ください



### 結 果

【増 収】 約800万円  
【コスト削減】 約3,200万円

【合 計】 約4,000万円の利益

### 考 察

今回、体制整備したことで、継続した診療報酬の算定や経費削減につながる成果を得ることができました。継続的に薬剤師が病院経営に貢献するには、診療報酬改定や薬価改定時など、医療動向の変化・ターニングポイントを察知し、再考し続ける必要があります。

ありがとうございます。いつも感謝していますよ

院 長 内 藤 浩



# 2

## 愛は、病院を救う

～お金があると愛が潤います～

### 本当に愛が潤い始めています。

桜ヶ丘病院 看護部長 岩崎 厚子



チームのメンバーの頑張りが職員の意識を変え、他の部門でもひとつずつできることを実行していった結果、1年で2億5千万円を超える収支改善を成し遂げることができ、病院新築計画も無事に進み始めました。

最近では自然と職員の笑顔も増え、患者さんに対しても今まで以上に気づかい、やさしく接することができるようになっております。気がつけば本当に「愛は、病院を救う」結果となっていました。しかしまだ志半ばです。今後もこの結果に満足せず、貪欲にできることを取り組んでいきたいと思っております。

今回は私たちの成果を認めていただき本当にありがとうございました。



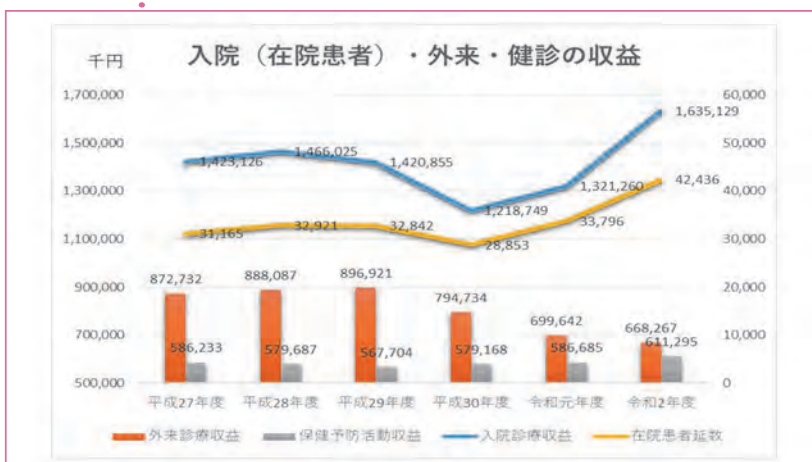
#### 取り組み内容

当院では常勤医師が減少傾向にあり、非常勤医師に診療の多くを依存しています。医師の減少とともに外来収益が減少し、次第に病院全体の収益も悪化し、職員のモチベーションも毎年の赤字決算で下がる一方でした。

このような状況の中でも病院の移転新築計画は進めておりましたが、ここ数年の収支状況ではとても償還計画を立てることができず、いよいよ桜ヶ丘病院自体の存続が危ぶまれはじめた時だからこそ職員達の目が覚めました。

きれいごととは言ってられない、お金がないと何もできない、お金を得るにはどうしたらよいか、という危機意識を全職員が持つことによってはじめて病院が生まれ変わるのだ、ということを実証すべく職員を代表して当チームメンバーが集結し、「各部署で何ができるか」を考えひとつずつ実行をしていきました。

中心となった看護部では地域の連携を強化、施設への訪問回数を150%増やしました。一方、在院日数を適正化するとともに空床状況を各施設にお知らせしていくことを続けた結果、2ヶ月で40人以上在院患者を増やし、かつ利用率も高め安定することができました。



#### 院長による 評価ポイント

R2～R3にかけて、病院経営を視野に入れた様々な多職種チームによる業務改善の基盤を築くことができ、発表した内容以上の偉業を成し遂げている。さらに素晴らしいことに、この勢いは、R4にも衰えることなく、また、コロナ大禍を病院丸丸となって乗り越えた経験も追い風にして、ますます進化している。このような頼もしいスタッフの力を今後も活かすことは管理者の責任だと認識し、私自身も奮起している。(院長 森 典子)

# 3

## 外来診療科受付の集約化に向けた取り組み

～医師の働き方改革推進への道～

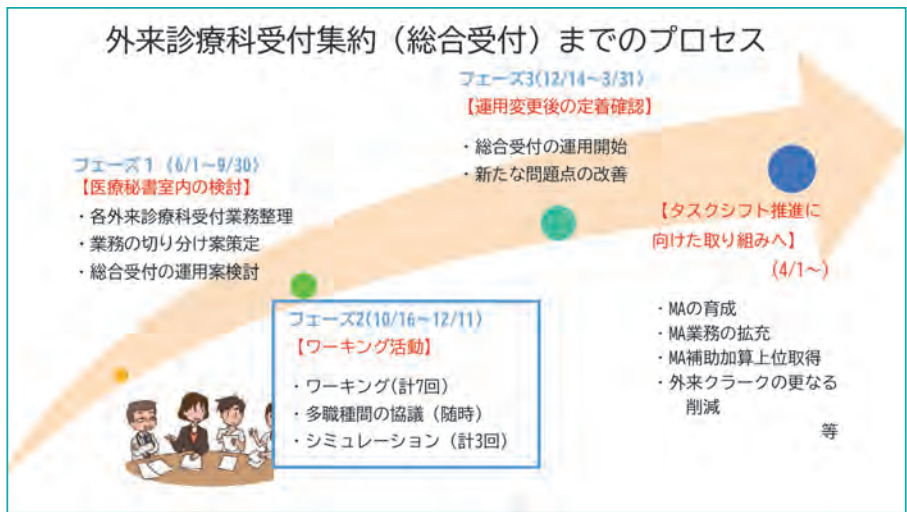
星ヶ丘医療センター 経理課長補佐 福永 幸子



当院では複数に点在する外来診療科受付（24診療科8か所）の業務のあり方を抜本的に見直し、その受付の集約化と運用変更を行うことで、効率的な人員配置の実現に向けて取り組みを行いました。外来クラークとして従事している職員を医師事務作業補助者（MA）へ転換することで、新たな雇用をせず、MA員数の充実を図り、医師の働き方改革の更なる推進と医師事務補助体制加算の上位取得を目指す土台作りを多職種とともに取り組んだワーキング（WG）活動を行いました。

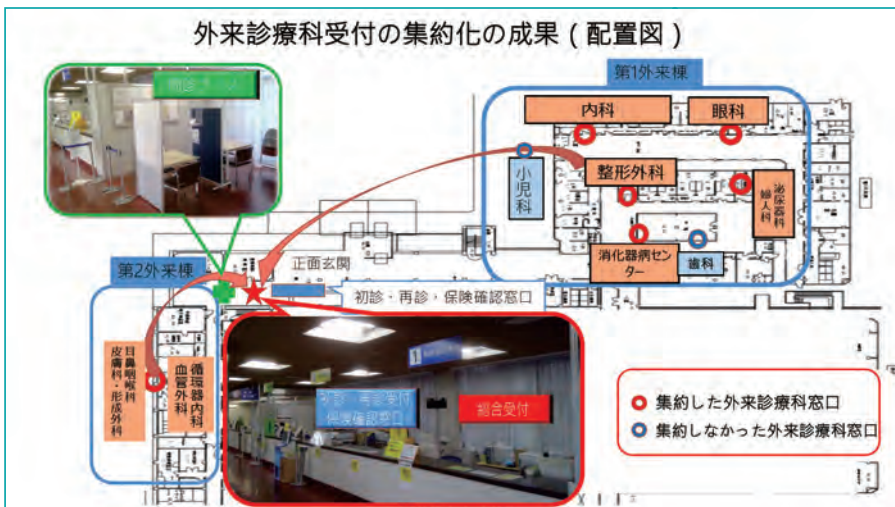
WGが始まった当初は、参加メンバーから「できない理由」などネガティブな発言も多く、受付集約化などできるのかと思いました。そんな膠着状況の中、WGリーダーよりWGルールとして「実現するために知恵を出し合う」のスローガンが掲げ、実現に向けた課題を整理し、各部署や関連部署に解決案を次回WGまでの宿題としたことで、WGメンバーも次第に当事者意識が芽生え、前向きな議論ができるようになりました。

また、解決案をWGでさらに議論を深めることで、多職種による多角的な視点からの新たな課題も見つかり、その課題解決を積極的に議論される雰囲気になっていったことは少し驚きでした。医師事務作業補助者を筆頭に参加メンバーの前向きに取り組む姿を見てこれなら上手くいくといつの間にか確信を持ったように思います。



更に驚いたことは、最終的に患者導線や受付集約化による運用変更も決まり、シナリオによるシミュレーションを行ったのですが、複数のWGメンバーからシミュレーションの中での課題が提示され、最終的には1回のシミュレーション予定が、3回行い、受付集約の運用変更にごぎつることができました。3回のシミュレーションの効果もあってか、開始後は大きなトラブルもなく、スムーズに受付集約化を実現することができました。

今回のWG活動を通し、多職種の多角的視点による課題解決力の効果の大きさを実感するとともに、「できない理由」を探すのではなく、「実現するために何をするのか」を考えることが重要であると改めて感じる活動であったと思います。



院長による  
評価ポイント

受付集約は外来診察室の効率的な運用やマンパワーの節約につながり、新病院でもそのまま応用できます。多職種での検討が奏功したと思います。（院長 細野 昇）



# 4+

## 電子カルテ導入に伴う 外来紙媒体の統一化および 患者満足度向上への取り組み

下関医療センター 副看護師長 吉田 智子

JCHO下関医療センターは、山口県西部、本州の最西端に位置する関門海峡、周防灘、響灘と三方が海に開かれ、自然と文化に恵まれた海峡と歴史のまち下関に位置しています。病院の周辺には、明治維新の志士を祭る桜山神社をはじめ、多くの史跡があり下関の往時が偲ばれます。当院は、急性期医療を提供すると同時に、健康管理センター、介護老人保健施設、訪問看護ステーションを併設しており、疾病の予防から、医療、介護までシームレスに提供できる体制を整えています。「3つのクライアント（患者および家族・地域・職員）を大切にす」基本方針のもと、地域医療に貢献し、よりよい医療を迅速に提供できるように努めています。

2021年6月の電子カルテ導入に向け、診療に関する書類の整備を行う中で、外来診療で取り扱う説明文や問診票等が161種類と多いことが分かりました。また、外来問診票の文字がにじんで見づらいなどの患者からの問い合わせや、問診内容の不備によるスタッフから患者への説明が多く発生しており、その都度対応に追われていました。そのような状況は、患者サービスの低下に繋がっているのではないかと感じ、今回、患者と同じ目線で考え、患者サービスの向上と業務の効率化を目指して活動しました。その取り組みの中で、紙媒体の文書の電子化および診療科ごとに存在していた問診票の統一化、レイアウトの見直しを行いました。

その結果、文書について医療者から患者へ説明する時間の削減が図れたと同時に、患者から医療者への問い合わせの時間も削減できました。患者の反応は見やすい・書きやすいなどの肯定的な声が聞かれ、スタッフからは、時間的余裕が生まれ、心の余裕に繋がったという意見が多く、医師からは、診察時間の短縮にも繋がった、見やすいものには見る価値があるとの意見でした。1回の患者対応で1分間の時間が削減できたと仮定すると、年間1820時間の削減となります。この時間は、JCHO職員1名の年間労働時間に相当します。これだけの膨大な時間を、他の患者サービスに費やすことができるようになることは、よりよい医療の提供に繋がると考えています。



この度は、優秀賞をいただき感謝申し上げます。今回の取り組みは言葉にしてしまえば、「紙1枚変える」小さなことと思うかもしれませんが、いままで当たり前となっていて、見過ごしていた部分を改善することで、紙1枚変えるだけでも大きな変化が生まれました。これらは、氷山の一角であり、まだ誰も気づいていないこと、見えていないことがたくさんあると考えています。今後もJCHO下関医療センターというブランド力を高め、どんな状況でもクライアントに求めてもらえる病院を目指すと共に、新たな価値を創造し続けるよう貢献していきたいと思っています。今回は、医師をはじめ多くの方々の協力のおかげで、大きな成果へと繋げることができました。ご協力、ご支援いただきました皆様に深く感謝申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

紙媒体における医療者と患者との接触割合



院長による  
評価ポイント

チリも積もれば山となる。日常のささいなムダに気づき、取り除く試みが働き方改革や生産性アップにつながることを示した活動でした。（院長 山下 智省）

# 5

## 地方都市におけるJCHO主導の 新型コロナウイルス感染症の終息に向けた 組織横断的診療戦略

熊本総合病院 看護部 副看護部長 古賀 敦子

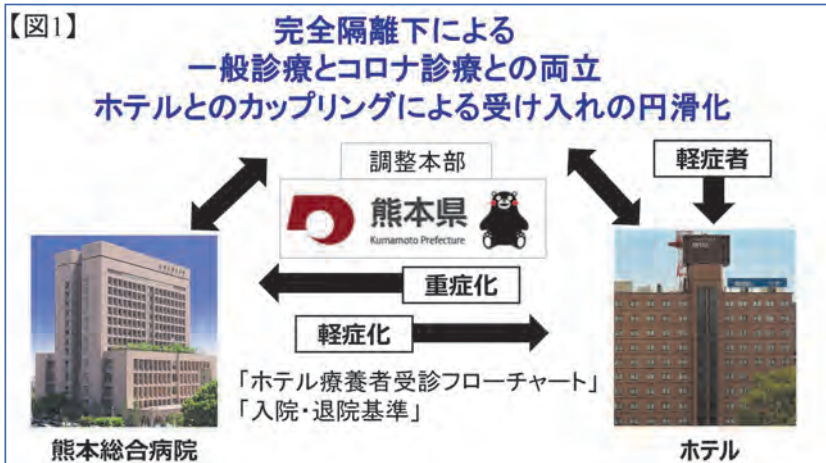
チーム発足から2年以上が経過し、ウイズコロナ時代の第一歩として、非日常の診療体制を日常業務に組み込むことができました。しかしながら、まだまだ課題は多く、変異・新規ウイルス出現にも対応でき、さらに起こり得る新興感染症のパンデミックにも備え、次のステップへと診療体制の構築が望まれます。

さて、この度の表彰で何より嬉しかったのは、コロナ禍で宴席も自由にできない中、頂いた賞金でホッと一息つけたことです。当院1階にあるカフェで、フレンチトーストや南阿蘇の珈琲を堪能でき、美味しい物が笑顔を運んで来てくれました。この笑顔が次の活力になるように、チーム一丸となって地域貢献に邁進いたします。



2020年から始まった、未曾有の事態となっている新型コロナウイルス感染症に対し、当院では同年2月、新型コロナウイルス感染症対策本部を設置し、多職種プロジェクトチームを中心とした活動を直ちに開始しました。

この取り組みの最大の成果は、地方自治体との密接な連携の下、職種横断的に独自の能力や特徴を活かし、急性期医療を縮小せず、医療崩壊も起こさずコロナ診療との両立を図れたことです。それが可能となった要因は、①自治体並びに地域医療の連携の下に当院の特徴的な機能を活かした「外来から入院まで完全隔離下」での効率的・安全な管理体制の確立、ならびに②宿泊療養施設（ホテル）と当院とのカップリングにより患者の重症度による入院治療と療養の連携の円滑化【図1】、③当院独自の「多職種横断的新型コロナウイルス診療フローチャート」による統一した診療の実践、④流行期に応じた感染症病床・発熱外来への適切・円滑な人的物的資源の効果的投入、⑤集団免疫獲得のため当院独自の予約システムを活用した地域最大のワクチン接種病院としての体制を確立し地域へ貢献していることの5点です。ワクチン接種に関しては、国立国際医療研究センターとの共同研究で、海外の著名な科学雑誌に報告するまでに至っております【図2】。これらにより多職種一丸となって取り組み、地域の危機的コロナ感染状況の打破に大いに貢献したことで、県下で最も活躍した救急功労施設として厚生労働大臣表彰を受賞することもできました。



### 院長による 評価ポイント

熊本県におけるJCHO主導の新型コロナ感染症診療戦略を立ち上げ、業務の忙しさに何ら不平不満をこぼすことなく全員が一丸となって通常の急性期医療を怠ることなくコロナ感染症医療の業務改善に取り組んでくれた当院の優秀な医師団を始めとする全職員に賛辞を贈りたいと思います。（院長 島田 信也）

# 6

## JCHO 山梨病院 2020年度経営改善プロジェクト

### ～TQM (Total Quality Management) 活動の試み～

山梨病院 地域医療連携室 係長 中村 成一郎

この度は、優秀ポスター賞という名誉ある賞を頂き、大変光栄に思っております。

今回評価をいただいた「経営改善プロジェクト」は、これまで山梨病院において、患者獲得に向け行われてきた様々な取り組みについて“横の連携”を推進し、“全体として大きな成果を生み出す”というビジョンからスタートしました。

これに着想を得たのがTQM (Total Quality Management) という経営管理の手法でした。TQMは“総合的品質管理”と呼ばれるもので、部分的ではなく、全体で品質の向上を目指す取り組みを指します。TQMは、医療などの人的サービスにおいても応用できることを知り、今回のプロジェクトの理論的枠組みに採用しました。

具体的な活動内容と結果は、ポスターの通りですが、今回成果を生み出せた一番大きな要因は「職員の意識改革」ではないかと考えております。

プロジェクトの背景、目的と意義、方法、ロジックモデル、期間、倫理的配慮、環境整備、評価指標、増収効果を含んだ企画書や評価シートを作り込み、医局会や幹部会で丁寧に説明したことや、プロジェクトの結果を毎月フィードバックしたことにより、職員の納得や理解が得られ、これが意識改革や行動変容に繋がったのではないかと振り返っております。プロジェクト終了後の課題も多く、すべてが順調とはいきませんでした。今後の病院運営を検討する上で非常に有益な経験を得たと思っております。

最後になりますが、叱咤激励して下さった病院長、院長補佐、副院長、看護部長、事務長、協働したプロジェクトチームのメンバー、全面的にサポートしてくれた地域医療連携室の仲間、そして共に汗をかけたすべての職員に心からの感謝を申し上げ、私の感想とさせていただきます。この度は誠にありがとうございました。

#### チームメンバー

|               |                    |
|---------------|--------------------|
| 石原 司 (副院長)    | 筒井 真由美 (看護師長)      |
| 佐々木 茂 (副院長)   | 青柳 千晴 (看護師長)       |
| 壺屋 みゆき (看護師長) | 川口 常伸 (事務長補佐 (経理)) |
| 清水 千登勢 (看護師長) | 吉澤 宏行 (事務長補佐 (医事)) |
| 有賀 真理 (看護師長)  | 長田 邦江 (外来係長)       |
| 島津 弘江 (看護師長)  | 中村 成一郎 (地域医療連携係長)  |



#### 方法

課題に応じた独自のロジックモデルや企画書を作成することにより、職員全員のベクトルを合わせ、A～Eの5つのプログラム (TQM活動) を組織横断的に推進した。

| 課題           | プログラム                | 担当 (職種、部署、委員会)                           |
|--------------|----------------------|--|
| 救急患者の受け入れ    | A: 救急患者の受け入れ推進       | 医師、外来看護師<br>地域医療連携室、救急委員会                |
|              | B: 地域包括ケア病棟への円滑な転棟   | 医師、病棟看護師、地域医療連携室<br>医事入院係、DPC、外来・病床運営委員会 |
| 適切なベットコントロール | C: 急性期病棟の在院日数の適正化    | 医師、病棟看護師、地域医療連携室<br>医事入院係、DPC、外来・病床運営委員会 |
|              | D: 地域包括ケア病棟の在院日数の適正化 | 医師、病棟看護師、地域医療連携室<br>医事入院係、DPC、外来・病床運営委員会 |
| 紹介患者の増加      | E: 開業医等への渉外活動        | 地域医療連携室、病診連携地域医療委員会                      |

#### 考察とまとめ

検討項目の結果から、本プロジェクト (TQM活動) は、コロナ禍における当院の経営改善に有効であったと言える。

本プロジェクト (TQM活動) を通じて、病院職員の意識改革が図られ、マイナス収支であった上半期からのV字回復に成功した。

職員のベクトルを合わせ、一致団結するためには、現状と課題を明らかにした上で、戦略プランを「可視化」「共有」することが重要である。

今回評価できた範囲は限定的であるが、今後も職員全員 (Total) で、医療・サービスの質 (Quality) を、継続的に向上 (Management) していきたい。

#### 院長による 評価ポイント

今回受賞の対象となった「経営改善プロジェクト」における中村氏の指摘は明確であり、注目すべきは「適切な項目設定」と「成果の可視化」にある。様々な機会を通じたフィードバックは、課題の共有を通じて、スタッフの意識改革にもつながっている。今後もこうした取り組みを通じて、より効率的で、質の高い地域医療の提供につながっていくことを期待している。(院長 佐藤 公)



# 新型コロナウイルス 薬剤師活動を今 ～ JCHO法第21条による

災害級に準じた新型コロナウイルス感染症  
広域派遣があり、臨時医療施設の  
新大阪スマイ  
女子医大東医療センター跡（2/20～3/31  
たので報告します。



7F～14F：ホテル療養  
保険区分：保険診療  
薬剤請求先：大阪医科大学

2F/5F/6F：中等症患者  
保険区分：自由診療  
薬剤請求先：大阪府

大阪地区は近畿四国地区薬事専門職（大阪病院薬剤部長 辻川正彦氏）が臨時施設を管理している大阪府と派遣元病院の調整の役割を果たしました。スマイルホテルには、薬剤師としてはJCHOより約1週間交代で1名、国立病院機構より2週間交代で3名、大学病院より3月の1か月間1名、派遣され、他団体の薬剤師との連携が必要となりました。



主な業務内容は、COVID-19治療薬などの薬品管理・発注・調剤・ミキシング、持参薬の確認、必要薬剤の調達と医師に処方および診療情報提供書の依頼、医師のオンライン診察および同意説明の補助を担いました。

## Voice 1

星ヶ丘医療センター 薬剤師 福田 裕子氏



活動は、ホテル厨房を薬局にすることから始まりました。私たちの最大のミッションは、電子カルテが使えない、限られた医薬品しかない中で、安全・適切な薬物治療を行うシステム作りでした。それぞれの薬剤師がアイデアを出し合って、様々な問題解決に取り組みました。患者さまの持参薬が切れた時も、かかりつけ医療機関や薬局と連携をとり、投薬を続けることができました。Google Driveに残ったマニュアルは、医師・看護師が困らないようにという思いと、自分の後に活動する薬剤師への思いやりが詰まったものになりました。医師・看護師から「薬剤師がいないと困る!」と仰っていただき大変うれしく思いました。改めて私たちのチーム力の高さを実感しました。

東京地区は関東地区薬事専門職（埼玉メディカルセンター薬剤部長 伊藤典子氏）が臨時施設を管理している東京都と派遣元病院との調整の役割を果たしました。東京女子医大東医療センター跡の臨時施設（高齢者特化型）の薬剤師はJCHO薬剤師2名のみという状況で、大阪地区とは異なる現地配置でありました。SNSの活用は派遣薬剤師間のみならず現地と薬事専門職間の有益な情報共有ツールになり、派遣薬剤師と薬事専門職の連携が図れました。



# ス感染症の臨時医療施設での 後に繋げる

## 薬剤師広域派遣より～

東京高輪病院薬剤部長  
本部医療部医療課薬事専門職併任 片山 歳也

(COVID-19)に対して、JCHO法21条に基づき薬剤師のルホテル(2/17～3/31 薬剤師1名：述ベ7名)と東京薬剤師2名：述ベ14名)への薬剤師の広域派遣を行っ

薬剤業務としては安全キャビネット内における無菌調製(ソトロピマブ、レムデシビル)、レッドゾーンとFace time等を用いた持参薬確認、薬剤師が事前作成した院外処方発行支援、院外処方箋の疑義照会プロトコルによる変更報告書作成、院外薬局から調剤薬の受け取りと内容確認は行い、業務手順書作成と東京都からの派遣薬剤師への引継ぎを行いました。



今回の薬剤師広域派遣は本部薬事専門職と地区薬事専門職が連携し、派遣元薬剤部長に協力支援を仰ぎ、迅速に対応できました。平時における薬事専門職会議、全国薬剤部長会議での薬剤師間の連携の重要性を感じました。特に東京女子医大東医療センター跡の高齢者特化型臨時医療施設における、薬剤業務では院外処方支援において医師・看護師負担軽減といったタスクシフトが実践できました。さらに安心して安全な薬物治療の提供、地域の薬剤師(開局薬局)との連携という部分においても、JCHO薬剤師に期待される地域医療推進の役割の一端を担うことができたと感じております。このような活動におけるJCHO薬剤師のやりがいや魅力という部分を薬剤師募集に活用していきたいと考えており、2022年9月の日本医療薬学会(群馬)で発表予定であり、次に繋げていきたいと思っております。

最後に今回の薬剤師広域派遣において、ご理解とご協力いただきました派遣薬剤師、派遣元薬剤部長と薬剤部員の皆様、そして病院管理者の皆様に感謝申し上げます。派遣期間において、日報報告支援ならびに現場支援に精力的に活動されました薬事専門職の辻川正彦氏、伊藤典子氏に重ねてお礼を申し上げ、ご支援頂きました本部医療部および地区事務所の皆様にも感謝申し上げます。

## Voice 2

船橋中央病院(現新宿メディカルセンター) 薬剤師 奥主 仁氏



1週間という短期間派遣で担当者が代わるため、業務の単純化・効率化を考える必要がありました。私は施設開設後の第2班として参加しましたが、偶然にも前後の第1、第3班には人事異動に関連し以前より顔見知りの方が居たためスムーズに業務引継ぎが出来ました。また、即断が求められる状況が多い中、必要時には薬事専門職や前任者とLINEアプリを用いてリアルタイムで相談が出来たことは非常に心強かったです。

JCHOチームの強みを感じ、また新しい医療貢献の形を見た瞬間でもありました。個人として貴重な経験が出来た一方で、広域医療派遣に送り出してくれた同僚には心から感謝しています。

### 派遣薬剤師(派遣時所属施設)

#### 【大阪】

福田裕子(星ヶ丘)、森脇 崇(大阪)、東 克彌(京都鞍馬口)、仲田 美智代(大和郡山)、鈴木 朋克(東京高輪)、秋吉 尚雄(九州)

#### 【東京】

水野宏昭(金沢)、加藤淳一、菅原真那、森田淳介(埼玉)、角谷 瞳(札幌北辰) 斎藤雄大(仙台) 藤掛沙織、佐野真由美(新宿) 野田美保(東京高輪)、奥主 仁、我妻央陽(船橋) 荻野知紀(山梨)、樋口泰子(湯河原)

京都鞍馬口医療センター  
栄養管理室長 田川 麗子

# 1. 京都ならではの 和菓子を手作りしています！

当院はクックチルシステムを利用したメニュー展開を行うとともに、嚥下食や化学療法食（ほがらか食）など多彩なメニュー提供をしています。

ほがらか食では、患者様への聞き取りや今までに選択されたメニューから好まれるものを検討し寿司やカレー、関西ならではのたこ焼きやお好み焼き、うどん、茶碗蒸しなどを選べるようにしています。

また、入院中にお誕生日を迎えられた患者様にメッセージカードとケーキをお付けします。食事制限のある方にはケーキの代わりにゼリーを提供し入院中でも楽しみを感じて頂ける工夫をしています。

行事食では調理師が腕を振った手作りデザートを提供しています。

夏越の祓では京都ならではの水無月、端午の節句には柏餅、文化の日にはキャロットケーキなど季節に応じたデザートを提供し好評を頂いております。

これからも、患者様の病状に合わせて様々な食事が提供できるよう取り組んで参ります。



# 2. 「病院直営給食」で 美味しい食事を

熊本総合病院 副栄養管理室長 白坂 亜子

当院は「美味しい食事」を第一目標にしながら、「治療効果に繋がる食事」や「食材の鮮度・素材を活かす献立」も併せて直営給食で提供しています。



当院のトマト料理

## 地産地消

病院のある八代市は季節ごとの農作物が豊富で、今はトマト、サラダ玉葱、メロンが旬です。例えば特産のトマトはサラダで食べても美味しいですが、完熟トマトを牛肉と一緒に「しぐれ煮」に工夫したところ、評判の良いメニューとなりました。

## 個人対応

アレルギー食材はもとより、患者様の高齢化で食形態の細分化、食歴による偏食、主食の希望など、鋭意対応しています。また、入院中に誕生日を迎えられる患者様にケーキと赤飯、誕生日カードをつけています。これは当院のスローガンの重要な要素の一つである「おもてなし」の実践に繋がっています。

## 直営メリット

昨今、食材価格の高騰は給食現場を直撃していますが、献立の見直し、材料の変更を迅速に行い「美味しい食事」を工夫できる事が直営給食の強みです。地元業者と顔が見える関係を構築している事で、少し形が悪くても新鮮な野菜や市場で仕入れてきた生の魚を納品してもらえ、安心な食材で安全な食事を提供できます。当院では管理栄養士が給食業務に進んで加わっており、自信をもって栄養指導業務も行えます。

入院中、自宅の食事と同じように、直営給食で旬を味わい、健康で美味しい食事を提供できるようにみんなで力を合わせて頑張っています。

# 3. 飾らない料理に一工夫 病院全体で給食改善を目指しました!

大阪病院  
副栄養管理室長

塩田 恵理都

入院患者さまの楽しみの一つに、食事が掲げられます。

【病院の食事は味気ない、美味しくない】というイメージが強いのか、JCHOグループのアンケート調査でも、給食部門の満足度評価はやや低値を示します。また【献立名と内容に差がある、同じ内容の食事が続く】【調理方法の工夫が必要】など改善の余地が問題視されていました。

当院では、5週間のサイクルメニューになっており、5週間毎に、同曜日に同一献立が長年続いており、マンネリ化に繋がっていました。

献立の調整は、同週内で献立の入れ替えを行うことから始め、同曜日に同一献立にならないよう変更していきました。また患者さまアンケート結果を踏まえ、『日常の食事と変

りない食事』をコンセプトに、当院管理栄養士と委託給食会社で給食の方針を検討し、院長、看護部長を始めとする幹部とともに協議を重ね、病院全体を挙げ、献立改善に取り組み、献立を一新することができました。

食事の味や食材も重要ですが、見た目の印象も良くできるように、華やかな色の食器を増やし、盛り付けの工夫など彩り豊かに病院給食のイメージアップを図りました。

昨今、物価高騰により給食材料費への大きな影響が出つつあるものの、委託給食会社の企業努力もあり、現状維持の委託食材費で給食提供を行って頂いています。互いに信頼関係を維持しながら、患者さまに喜んでいただけるよう、より良い給食提供を目指します。



～飾らない～ 料理に一工夫 粉もの文化を活かし…週1度、麺類も組み入れています 食事ごとにお茶、お箸、ナブキンも添えて

当院の  
メニュー  
紹介

# 4. ニーズ把握と 委託業者との協議がカギ!

人吉医療センター 副栄養管理室長 中村 利枝

当院の給食業務はNST活動や栄養管理体制充実など栄養管理強化の流れを受け、業務委託を行っています。

食材費や人員不足などの問題があり献立内容や食材の変更が続くほか、食事に対するクレームや患者満足度低下に頭を悩ませる時期がありましたが、その都度、委託業者と協議し、日頃から食べ慣れた味になるよう地元産の米や味噌、醤油を使用するなど改善を重ねてきました。

2017年度から管理栄養士が1名ずつ全病棟に専従し、栄養管理や個人対応を充実させたことにより、JCHO患者満足度調査結果比較表平均値では、2016年度3.96から2019年度4.06、2021年度は4.14へと上昇しています。

「手の込んだものはいらない」と言われる患者さんが多く、食事満足度調査でも「酢の物、果物、カレー」が食べたいメニューとしてよく書かれており、豪華な食事ではなく、自宅で慣れ親しんだ味を病状にあった量や形態で提供していくことが満足度向上に繋がっていると感じています。

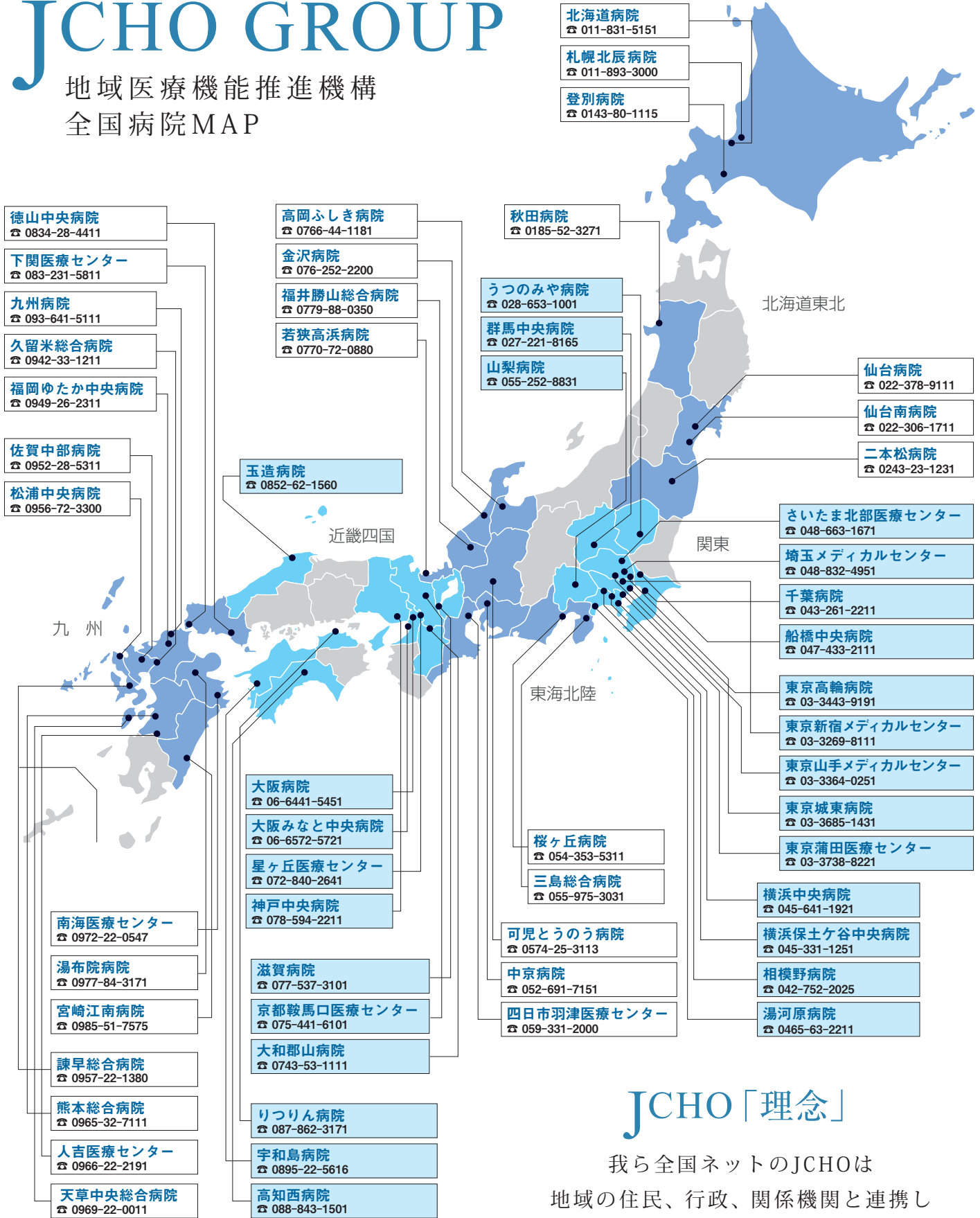
また、入院中に季節を感じていただけるよう月2回の行事食に力を入れています。今後も闘病中の患者さんに負担がかからず早期退院に導ける食事の提供を目指し取り組んで参ります。



安心の地域医療を支える

# JCHO GROUP

地域医療機能推進機構  
全国病院MAP



## JCHO「理念」

我ら全国ネットのJCHOは  
地域の住民、行政、関係機関と連携し  
地域医療の改革を進め  
安心して暮らせる地域づくりに貢献します

### 地区事務所

本 部 〒108-8583 東京都港区高輪3-22-12 3F  
 北海道東北地区事務所 〒981-3281 宮城県仙台市泉区紫山2-1-1 仙台病院3F  
 関東地区事務所 〒108-0074 東京都港区高輪3-22-12 1F  
 東海北陸地区事務所 〒457-0866 愛知県名古屋市中区三栄1-1-10 中京病院健康管理センター内  
 近畿四国地区事務所 〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島4-2-78 大阪病院別館3F  
 九州地区事務所 〒866-8662 熊本県八代市松江城町2-26 熊本総合病院健康管理センター棟4F

JCHOニュースアーカイブ  
URL  
[https://www.jcho.go.jp/jchonews\\_archive/](https://www.jcho.go.jp/jchonews_archive/)

